

「定食亭 定吉（こりしょくこりさだきち）」

「あて名のなりXツセーシ」

今日もながい旅路を

駆け出した

それでもゴールにたどり着けない

笑う奴をミカトし

家路に帰る

誰かが僕を悪く言うけど

僕は百人の屑よりも

一人の愛する奴を愛し続けたい

毎日良ただ長いリースのまうに

あてもなく続き

僕を苦しめる

この長い坂を越えたら

何がわってくるのか？

僕は何があっても生きるよ

そしてただ幸せだと思いたい

講評

この短いけれど中身の濃い詩には、「長い」という言葉が3回使われていますね。「ながい旅路」「長いレース」「長い坂」。この長さは、「ゴール」がなく、「あて」がない。つまり、果てがないかのように思える。それはタイトルの「あて名のない」につながります。それでも、定食亭定吉さんは、この詩を発した。誰かに届くと信じて。誰か、「一人の愛する奴」に向けて。この信じる気持ちに感銘を受けました。その信じる決意が、最後の3行に現れていると思います。それが宛名のない手紙を届かせるし、果てがないかのように思える長い道に、ゴールをもたらすでしょう。（選者・星野）

君に愛してると伝えたい